

ラテンアメリカをとらえる視点 —パラグアイを事例として—

		山内 洋美 宮城県塩釜高等学校 地理歴史科	
教科	地理歴史（地理 B） 5 時間＋1 時間	対象	3 学年（選択者）21名 2 学年（選択者）91名

I 実践の目的

—パラグアイをどうとらえるか—

普段、地理の授業を行っていて、ラテンアメリカについては、先住民文化や植民地支配と民族問題、開発と環境問題、格差といったものが多く取り上げられていると感じていた。しかしパラグアイに行ってみて、そのような視点だけでは教材にできにくいと感じた。そこで、高校地理 B の教科書を改めていくつか見てみたところ、先住民（インディオあるいはインディヘナ）と移住者（ヨーロッパ系、アフリカ系、アジア系）の文化が融合した「混成文化」（東書地理 Bp307）「新しいラテン系の文化」（帝国地理 Bp305）といった表現がみられ、これだ、と思った。パラグアイはラテンアメリカのなかでも群を抜いて民族・文化的に混血が進んだ国であると感じたからだ。したがって、パラグアイを事例として高校地理 B の授業を考えるときに「混成文化」がキーワードとなると考えた。

(1) 問題の所在 —「混成文化」を形成することから—

パラグアイという国は、歴史的には、内陸国であったために征服者であるスペイン人が先住民の言葉や文化を取り入れざるを得なくなったことや、スペイン人イエズス会宣教師たちによるパラグアイの先住民の多数派であったグアラニー族とともに形成したミッションと呼ばれる伝道村の役割が大きい。つまり周辺のさまざまな脅威から土地と生活を守るために先住民の暮らしごと囲い文化となったとされる。

例を挙げれば、亜熱帯で冬もさほど冷え込まないことが多いパラグアイでは先住民の伝統的民族衣装が見られず、スペインから持ち込まれた綿花やレース編み（テネリフレース）の技術が先住民の編み物の技術と合わさって、アオポイーやテイポイー（図 1）と呼ばれる刺繍の施された綿布、ニヤンドゥティと呼ばれるレース編みが生まれ、スペイン風の衣装となって先住民の身を覆った。さらに白一色だったそれらの衣装に鮮やかな色を与えたのは先住民であったとされる。また、ニヤンドゥティの模様には、先住民がパラグアイの自然からみられるモチーフを多く取り入れている。

また、食に関しては、先住民が食しなかった牛乳や卵をスペイン人が持ち込んだ結果、先住民のトゥモロコシのスープにチーズや卵が入って代表的なソパ・パ



図 1 テイポイーをまと子どもたち

ラグアージャ(図2)というケーキになったともされる。また、左右対称の住居という意味のクラタ・ジョヴァイ(ランチョ・図3)は先住民の住居に元の形があるとされるが、地方の農家では先住民に限らず多く見られ、アスンシオンなど都市部の住居にもとりいれられている。

さらに、ドイツや日本からの移民の影響も大きい。西部チャコ地方に入植したメノニータ(メノナイト)の人々は、その信仰と伝統的な暮らしを守りながら、年降水量が少ないうえに塩分が多い土壌の地域で、ため池を作り、酪農を定着させ、ドイツ政府の支援も得てパラグアイで最も質の良い乳製品を生産する地域となっている。また、大戦後のどさくさに紛れてナチスの残党も亡命しており、東部の小さな町の教会を見学したときに、かつて金属供出で失われた3つの鐘を、ドイツ政府が大戦のお詫びにと寄贈したと聞いた。おもに第二次世界大戦後にチャコ戦争で減少した労働力を補う目的で多く移民した日系移民も、パラグアイでいくつかの移住地を形成し、もっとも東部でブラジルに近いイグアス移住地では不耕起農法による大規模大豆栽培を成功させ、パラグアイの大豆生産量6位、輸出量4位を達成する足掛かりを作った。また、先住民の飲み物マテを愛飲し、それによって野菜を取らずとも生きてこられたパラグアイ社会に、日系移民は野菜の生産と消費の文化を持ち込み、広げた。さらに青年海外協力隊員が野菜の消費を進めるプロジェクトを実施し、高血圧と糖尿病が増えているとも言われるパラグアイ農村地域の生活改善に役立てようとしている(図4)。

同じラプラタ川に面する平野部であっても、南部のアルゼンチンやウルグアイは、ヨーロッパ系白人が先住民をほぼ追放した「白人国家」になったのに対し、パラグアイがこのように「混成文化」となったのはなぜか。地理的に考えると、内陸国であり南回帰線上に位置するパラグアイの自然環境および他国との位置関係が深くかかわっていると考えている。

現在のパラグアイの中心地域である東部は、ブラジル高原とアンデス山脈にはさまれた平原で、一年を通じて氷点下に気温が下がることはほとんどなく、降水量も1,400~1,800mmと多く、農耕に適している。また首都アスンシオンは、パラナ川の支流パラグアイ川に面し、河川交通を利用することが可能で、しかも河岸に丘陵地を有したため水害に遭いにくい地域を市域とすることができた。一方で、アスンシオン市郊外、パラグアイ川の低地にはスラムが広がり、今年にはエ



図2 ソパ・パラグアージャ(左下)



図3 クラタ・ジョヴァイ



図4 野菜料理のレシピを広める
協力隊員

ルニーニョの影響で6月に大雨が降り、8月中旬においてもまだ冠水していた(図5)。

もともとパラグアイ川・パラナ川下流は大水害地帯で、ヨーロッパからのアクセスが良いラプラタ川河口のブエノスアイレスは、周辺の先住民との争いもさることながら何度も水害や風土病によって盛衰を繰り返しているため、中心都市になることが難しかったとされる。そのような地域を中心に勢力を広げたのがアルゼンチンであり、かつては広大だったパラグアイから分離し、南部に広がったものであった。ウルグアイも同様で河口に位置し、首都のモンテビデオは周辺よりやや高く「山」に見えたことから名付けられたという。

また、パラグアイ東部、特にテラローシャの肥沃さは、19世紀のパラグアイ戦争(三国同盟戦争)も含めブラジルからの攻撃を絶えず受けており、現在もブラジルの資本家はその手続きの簡便さや土地の安さを魅力として大規模農業を行うために進出してきていることから推察される。またパラグアイ戦争で敗北を喫した後も、平地を持たないボリビアとの間に、西部チャコ地方の領有権を巡ってチャコ戦争が行われた。このように、常に周辺諸国が、パラグアイの地理的な利便性・優位性を求めて侵略を繰り返したことが、パラグアイという小国を先住民・移民問わず結束させるとともに「混成文化」が形成された理由ではないかと考えている。

(2) 「混成文化」をキーワードとしてパラグアイを地誌教材にするために

帰ってきてから写真を見返してみた時に、気づいたことがあった。地元の公立小学校の教室で撮った写真(図6)には、明らかにヨーロッパ系白人の血が濃いと思われる子どもと、明らかに先住民の血が濃いと思われる子どもと、その間に位置すると思われる子どもが、当然のように混在していた。教室の中で写真を撮っていた時には、彼らの顔立ちの違いを意識することはほとんどなかったし、もちろん子どもたち同士がそのことを気にしている様子も全く感じられなかったが、写真から思った以上に混在していたことに、パラグアイの「混成文化」の熟成度を強く感じた。それは、イグアス日本人移住地の日本語学校(図7)で日本語がたどたどしい非日系のパラグアイ人の子どもたちと会話に関しては全く不自由しない日系の子どもたちが、教室で違和感なく机を並べている姿からも感じた。

また、シウダー・デル・エステ市から陸路国境を越えてブラジルのイグアスの滝を訪れた際に、パラグアイ



図5 パラグアイ川の氾濫で水没した河岸のスラム、カテウラ地区(奥には生活の場となるごみ捨て場が見える)



図6 パラグアイの公立小学校の子どもたち



図7 イグアス日本人学校の中学生たち

イとブラジルの違いを大きく感じたのは、レストランでつり銭から勝手にチップを取っていく店員のふるまいであった。パラグアイでは、たとえ大都市や観光地であってもそのようなことは一切なかったし、観光客価格というものがあるようにも感じられなかった。パラグアイのほうが経済的には低位であるにもかかわらず、また40倍ともされる経済格差を実感することができないほどに人々が金銭にがつつすることなく、穏やかで親切であると感じたのはなぜか。それは例えば、メノナイトや日本人が自分たちの文化と言語を他国の移民と比べても変容少なく守り続けながら、パラグアイの中で一定の社会的地位を築くとともにパラグアイ社会に溶け込んでいるように見えるように、もう民族・人種を分けられないくらいに文化的にも混血が進んだパラグアイの寛容性が、格差をある意味受容することにつながってはいないかと考えたのである。それは、「テレレ」と呼ばれる、パラグアイ原産のマテ茶の回し飲みの文化や、道端で「テレレ」ばかりしているように見える、パラグアイの男性たちののんびりした仕事ぶりともつながっているかもしれない。

もっとも、日系移民がスムーズに「居住地」と呼ばれる土地を得られたのは、ストロエスネル独裁政権（1954-89）下の「日本・パラグアイ移住協定」締結によるものであり、独裁政権下で政治家などによる土地の占有が進んでいたためでもあっただろう。日系移住地の中でも例えばイグアス移住地では、頻繁に土地なし農民による土地の占拠が行われ、自警団を作ったり、警察にパトカーや武器などを移住地の予算から提供するなどして土地を守っているという実情もある。また、アスンシオン周辺の大規模なスラムの形成やストリートチルドレン・ホームレスの存在等も含め、格差から生まれる問題がないわけではない。

いずれにしても、「メスチーソ」と呼ばれる先住民とスペイン人の混血の人々のみならず、パラグアイ戦争で失われた労働力を補う移民等も含めた、“サラダボウル”よりは“マーブル”に近い民族・文化の混血の度合い。そして、格差を感じさせない社会の空気と寛容性。以上が「混成文化」のなかでも特に混成が進んだというパラグアイの特色を明らかにするための大切な要素ではないかと考えている。

Ⅱ 授業の構成

これまで述べたパラグアイの特色を用いて、ラテンアメリカ地誌を学習するための指導案を作成した。

(1) 単元名

ラテンアメリカ

(2) 単元の目標

ラテンアメリカの「混成文化」がなぜ形成されたのか、ヨーロッパをはじめとする世界各地からの移民の流入のみならず、自然環境との関連も合わせて考察する。

(3) 評価の観点

- ・パラグアイについてのフォトリーディングに主体的に取り組ませる。(関心・意欲・態度)
- ・ラテンアメリカおよびパラグアイの位置・自然環境・社会環境についての適切な作業をプリントに行わせる。(技能・表現)

- ・「混成文化」をキーワードにラテンアメリカ諸国とパラグアイの特色を比較させ、その違いと背景を考えさせる。(思考・判断)
- ・パラグアイの地誌を、他のラテンアメリカ諸国の地誌と関連・対比させて具体的に理解させる。(知識・理解)

(4) 指導計画 (5時間+1時間)

- 1 時限：ラテンアメリカの自然環境を概観する
特に、グランチャコ周辺の地形・気候について、他地域と比較させる
- 2 時限：ラテンアメリカの産業について概観する
パラグアイの産業が教科書・地図帳にほとんど記載されていないことに注意させる
- 3 時限：フォトリディングによりパラグアイ地誌の特色を探る
グループで、それぞれ自然環境、資源と産業、交通・通信・貿易、生活文化(民族、宗教、言語、工芸・芸術・スポーツ)の各分野に分かれて写真を読み取り、その内容を共有してパラグアイの特色を探る
- 4 時限：パラグアイの地誌をまとめる
写真から読み取ったことを補足する資料を用いて、パラグアイの地誌についてまとめる
- 5 時限：ラテンアメリカの特色である「混成文化」について理解する
パラグアイの特色をラテンアメリカ諸国と比較することで、パラグアイの突出した民族・文化の混成度に気づき、そこからラテンアメリカがなぜ「混成文化」となったのかを考察する
- 6 時限：番外編「パラグアイと日本 ちがいのちがいの実践」
「パラグアイと日本 ちがいのちがいの」をつくって実践することで、パラグアイと日本の共通点や差異を確認するとともに、「ちがうこと」は必ずしも価値判断の対象にならないことに気づく

III 授業の詳細

3年生は旧課程の教科書を使っており、ラテンアメリカは世界の地域区分のところで現れる。また、2年生でも世界の地域区分を地誌で扱う。したがって、世界の地域区分を意識させながら、ラテンアメリカの地誌を概観させ、その中でパラグアイを扱うことにした。

1・2時間目 ラテンアメリカの自然環境・産業について概観する

○教科書等の記述に従って、一斉授業で行った。赤道をはさんで北緯30度～南緯45度まで広がるラテンアメリカの自然環境の特色と、自然環境に大きく影響される農林水産業および他大陸との距離の遠さからくる貿易の不利益性を中心に認識させようとした。

3時間目 フォトリディングによりパラグアイ地誌の特色を探る (3年のみ公開授業)

○生徒たちにはあらかじめグループワークの形で座ってもらい、パラグアイのテイポイーに似せた服装をして、アルパの音を聞かせながら、これからパラグアイのことについて学ぶことを知らせた。

○各グループには衣食住、自然環境と農業、商業・貿易、民族・言語・宗教、交通・インフラについての組写真（8枚）がそれぞれ渡されていることを知らせ、模造紙に写真を自由に貼り付けて、写真から読み取れることをどんどん書き込んでいくように指示した。



上水道水源の井戸と給水塔
(イグアス移住地)



ゴミの穴
(イグアス移住地)



乗り合いバス
(アスンシオン近郊)



変圧器のついた電柱
(イグアス移住地)



3人乗りのバイク
(国道7号線沿い)



イグアスダム
(イグアス移住地)



水道で手を洗う子どもたち
(ミルトス小学校)



赤土のレンガで舗装された道路
(ラパス移住地)

***生徒が交通・インフラの組写真から読み取ったことがら**

(イグアス) ダムが放水中 → 発電してる?
 家族3人がノーヘルでバイクに乗ってる
 広い道路・土が赤い
 子どもが手洗い・うがいをしている
 家に電気が流れている・電柱に何かついている
 日本の家のような家
 草やごみが燃やされている → ガラスのビンも燃やしてる?
 貯水池みたい・水道?

○時間を区切って各グループにその場で模造紙を掲げさせ、それぞれの項目に従って組写真を簡潔に説明させた。その後黒板に模造紙を貼らせた（図8）。

***生徒が組写真から読み取ったことがら**

〈自然環境と農業〉

- ・生協のパクリ？(ラパス生協)の工場・小麦の貯蔵庫
- ・小麦粉の包装がでかい(ラパス生協)
- ・緑の見たことのない作物(*キャッサバ)
- ・ラ・フランスを売っているおじさん(アスンシオン旧市街)



図8 フォトリディングの様子

〈民族・言語・宗教〉

- ・果物の積み方がうまい(露店)・周辺は草原
- ・おそらく中古品しか売ってない店だと思うが、新品だと言い張っているような店(都市部)
- ・日本の商品がたくさん売られてる・商品の種類が多い(日系スーパー)
- ・人形がたくさん売ってる(お土産物屋)
- ・デパートがある(都市部)
- ・引っ越しのサカイ的な会社(国境免税都市シウダー・デル・エステ)
- ・赤ちゃんがいる・外で服などを売っている=治安が良い(アスンシオン旧市街)

〈商業・貿易〉

- ・外国の子どもが日本語を習っている(日本語学校)
- ・さまざまな外国人がパラグアイにいる(日本語学校)
- ・さまざまな国の人にも分かるように、看板はいろいろな言語で書かれている(日本語学校)
- ・パラグアイも情報社会になってきている(PCの授業)
- ・栄養士の方が栄養成分について教えている
- ・日本の鳥居がパラグアイにもある
- ・教会？

〈衣食住〉

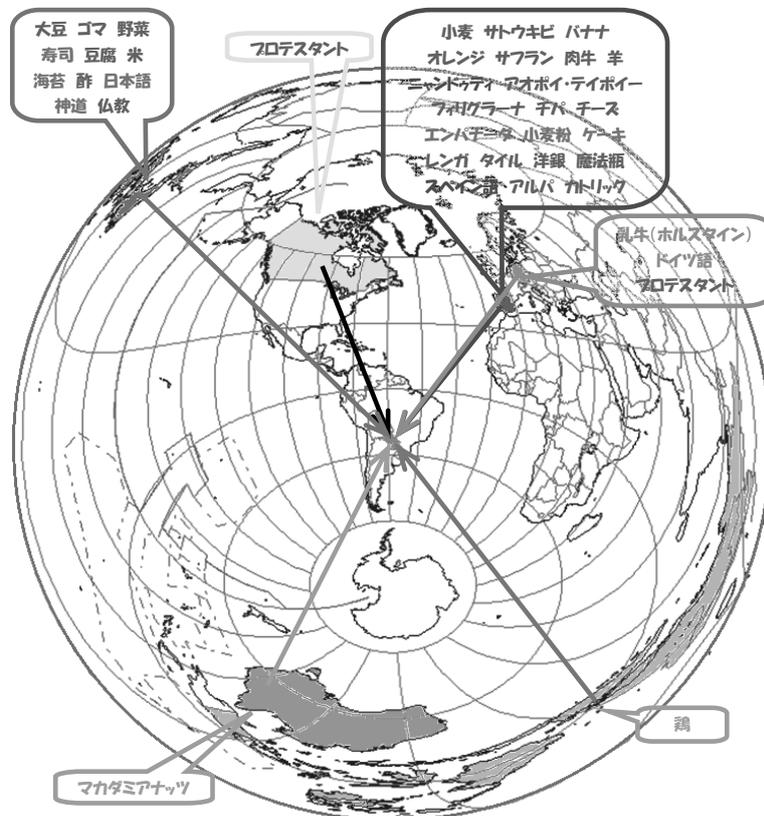
- ・ケバブがある(牛のアサード)・消火器が壁にある
- ・民族衣装を着てる・シンデレラみたいな服(テイポイー)・髪飾りが同じ・はだし・壁がはげてる・混血(メスチーソ)・窓枠が木製
- ・七輪を使ってる(バイオガス)・服が派手・ビーチサンダル履いてる
- ・ドーナツ的なもの(*チパ)を路上販売してる
- ・屋台・コカコーラ・置き方が雑(都市部)・衛生状態が悪そう
- ・白身魚(*ピラジャバ(淡水魚))の寿司がある(日系レストラン)
- ・土釜がある(穴が二つ・チパを焼く窯)
- ・全体的に黄色で味が薄そう・違うジャンルのものが同じ皿に乗ってる(パラグアイの農家での食事)
- ・統一感がない・うねうねしてる住宅・建物の距離が近い(国境免税都市シウダー・デル・エステ)

○その後、各グループに「ニヤンドゥティ」と「テネリフェレース」（ニヤンドゥティの起源となったカナリア諸島のレース）を1枚ずつ配り、その違いを挙げさせた。そして、テネリフェレースがスペイン人によってパラグアイにもたらされ、デザインや色をパラグアイの先住民グアラニー族が加えてニヤンドゥティとなったこと、さらにその原料である綿花はもともとラテンアメリカ原産であることを伝え、長い時間をかけて原料や技術・文化が大陸間を行き交って新たな文化が生まれたことを意識させた。

4 時間目 パラグアイの「混成文化」をかたちづくるものがどこから来たか探る

○一斉授業で行った。アスンシオン中心の正距方位図法を用いて、パラグアイに移入されたものの原産地・経由地を書き入れることで、パラグアイと他地域の距離や移動手段などを考えさせるとともに、パラグアイの「混成文化」がどのようにかたちづけられたかを考えさせた。

〈アスンシオン中心の正距方位図法とパラグアイへ訪れたことから〉



*日本ーパラグアイ：約20,000km（図の半径とほぼ同じ）

*スペインーパラグアイ：約10,000km（図の半径の1/2）

5 時間目 ラテンアメリカの特色である「混成文化」について理解する

○一斉授業で行った。ラテンアメリカの民族・言語の構成から、ラテンアメリカの「ラテン」はヨーロッパのラテン民族という区分からきていることを知らせ、大航海時代以降にラテンアメリカに多くの南ヨーロッパ人が移民し、またアフリカからの奴隷が移入されたことで、先住民に加えてヨーロッパ、アフリカの文化が混じり合ってラテンアメリカの「混成文化」が形成されたことを伝えた。そして、パラグアイにはそれが当てはまらないことも確認した。

6 時間目 番外編「パラグアイと日本 ちがいのちがい」の実践

- グループに分かれ、作成した「ちがいのちがい」カードを配り、その内容を読み合わせながら「あってもいいちがい」「あってはならないちがい」に分けてもらった。
- その後、各グループから1枚ずつ異なるカードを取り上げて「あってもいいちがい」か「あってはならないちがい」かを、理由を含めて説明してもらい、賛成者の数をそれぞれ数え、もっとも賛成者の多かったグループに、パラグアイで買って来たブラジル製のキャンディーを商品として渡した。

〈「パラグアイと日本 ちがいのちがい」印象に残ったカードと理由〉

パラグアイの日系の人たちは朝食にご飯とみそ汁と焼き魚などを食べるが、パラグアイ人の朝食はミルクを入れたマテ茶とチパというクッキーのみである。	<ul style="list-style-type: none"> ・何を食べるかは人それぞれでいいんじゃないの。 ・パラグアイ人がそれしか食べられないのは貧困からきているのか疑問に思った。
パラグアイに移住した日本人はどのような仕事でもできるが、日本に移り住んだ日系パラグアイ人は製造業などの単純労働にしか就けないことが多い。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイ人の職が限定され、仕事に就けない人が出ると収入が少なくなってしまう。 ・みな等しく権利を与えるべきだ。 ・教育・収入の格差が起こる。
パラグアイの乗り合いバスはドアが開きっぱなしで走るが、日本のバスはドアが閉まらないと走らない。	<ul style="list-style-type: none"> ・死亡事故が起こるかもしれない。 ・日本だったら危険だから絶対にそんなことはない。 ・パラグアイのバスには安全性がない。 ・安全性より機能性を優先すると常にリスクと戦わなければならない。
パラグアイでは運転免許をお金で買うことができるが、日本では試験を受けないと免許を取得できない。	<ul style="list-style-type: none"> ・お金で解決しちゃいけない。 ・試験を受けて知識を得ないと事故につながる。
パラグアイ人は雪を見たことがないが、日本人の多くは雪を見たことがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・気候的にしょうがない。 ・パラグアイはあったかいんだなあ。 ・日本にとっては当たり前のことでも、パラグアイにとっては当たり前じゃないんだ。 ・雪を見たことない人たちは雪にどんなイメージを持っているのか気になった。
パラグアイの大学生は働きながら夜間に大学に通うことが多いが、日本の大学生は昼に大学に通うことが多い。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人は親が働いたお金で大学に通っていることが多いけど、パラグアイでは自分で働いて通わなければならないのか。 ・経済的な格差があるから違いが生まれるのか。
パラグアイの小学校には給食がないところが多いが、日本の小学校にはほとんど給食がある。	<ul style="list-style-type: none"> ・資金的にも衛生的にもあまりよくないのか。 ・給食がないのは毎日お弁当を作る親が大変だ。 ・高校になったら給食がない不便さが身にしみたから。

<p>パラグアイの多くの人々は野菜を食べないが、日本人の多くは野菜を食べないとつらいと言う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・野菜はうまいので残念です。 ・野菜を食べずにどうやって栄養を取っているのか驚いた。 ・体で作れないビタミンをとるために野菜がないと辛いのだろう。
<p>パラグアイの日系の子どもたちの多くはスペイン語とグアラニー語と日本語を話せるが、日本人の子どもたちの多くは日本語しか話せない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人も周りに韓国とか中国があるのに、その言葉を話せないのが不思議だ。

○最後に、その月が誕生日であった生徒を助手として、パラグアイのスーパーで購入した風船に菓子を詰め込んで割り、落ちてきた菓子を拾うという「ピニャータ」を行い、パラグアイではこのようにして誕生日を迎える人が周りの人をもてなすのだという説明をした。生徒たちは戸惑いながらも、ブラジルやアルゼンチン・ペルー産のキャンディーやチョコレートをほおぼり、日本の菓子との見た目や味の違いなどを話し合っていた。

IV 実践の成果

後述する学習指導要領の内容と文言からもわかるように、高校地理Bという科目はもともと「開発教育」的な要素を含んでいる科目である。ゆえに、常日頃から世界におけるさまざまなことから素材として授業を行っており、今回もそのような形でパラグアイという素材を調理しようと試みた。生徒たちは、その聞きなれない国名の響きや、私が訪れた国ということに非常に興味を持ってくれた。そのため、生徒たちの反応も良く、フォトリディングやグループワークにも意欲的に取り組んでくれた。しかし、今年度は地誌中心で授業を行ってきた関係上、基礎的な系統地理の知識に欠けている部分もあり、どうしても写真からの読み取りが浅く、また読み取ったことがらと系統地理的な知識をつなぎ合わせることが難しいと感じられた。

+1時間として行った「パラグアイと日本 ちがいのちがいの」の授業に関しても、生徒たちの経験値の少なさや系統化・知識化されていない経験の多さも含めて、少ない予備知識と関連付ける力のなさからか、「あってもよいちがいの」「あってはならないちがいの」の判断基準や理由などが表面的・一面的なものになりがちだと感じられた。多様な視点で事象を見られるようにするには、もっと知識を得るだけでなく、使う・つなげる・共有するといった学習が必要だということに、改めて気づかされた。

V 課題

これまで「混成文化」、つまり混じりあうことにより生まれた独自性といった教科書に描かれたステレオタイプについて疑わずに授業を行ってきたが、パラグアイに滞在して、パラグアイの地誌が「混成文化」の究極の形でありながら、これまで用いてきたステレオタイプのイメージとかけ離れていることに気づいた。つまり、ラテンアメリカの「混成文化」≒ヨーロッパのラテン地域の文化の変形と考えられるような記述が多く、一方で先住民の文化は独自のもの

のとしてそれから分けてとらえられることが多かったように感じた。ところが、パラグアイにおいては、先住民の文化も、ヨーロッパのラテン地域の文化も、さらにはゲルマン地域、スラブ地域、日本、韓国、台湾…と、さまざまな文化の特色が、まるでマーズ模様のように見え隠れしているように感じられた。特に先住民の文化が非常に色濃く、しかも他の文化の影響を受けた形で日常に現れていた。さらに、それは人々の風貌にすら見受けられたのだ。

このようなパラグアイを地理の教材として取り上げることで、地域の捉え方（スケール、地域区分、分類等）について改めて考えるとともに、世界の多様性をわかりやすく捉えられるような授業にできないかと考えたが、そのような教材を作ることは困難であった。グローバル化が進み、違いが見えにくくなった世界で、さらに相手との違いを無視しあるいは抹消してしまうような捉え方をすることを防ぎ、地域性や多様性を大切にできる生徒を育てるための教材を開発することが、今後の課題となると考えている。

関連する学習指導要領の内容と文言

第6 地理 B

1 目標

現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。

2 内容

(2) 現代世界の地誌的考察

地域の規模に応じて地域性を多面的・多角的に考察し、現代世界を構成する各地域は多様な特色をもっていることを理解させるとともに、世界諸地域を規模に応じて地誌的にとらえる視点や方法を身に付けさせる。

ウ 州・大陸規模の地域

世界の州・大陸を事例として幾つか取り上げ、それらを多面的・多角的に考察してそれぞれの州・大陸を地誌的にとらえさせるとともに、それらを比較し関連付けることを通して州・大陸規模の地域を地誌的にとらえる視点や方法を身に付けさせる。

(3) 現代世界の諸課題の地理的考察

現代の世界や日本が取り組む諸課題について、広い視野から地域性を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を深めさせるとともに、地理的に考察する意義や有用性に気付かせ、地理的な見方や考え方を身に付けさせる。

ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題

世界各地に生起している地球的課題に関する諸事象を地図化して追究し、その現状や動向をとらえさせるとともに、地図化することの有用性に気付かせ、それに関する技能を身に付けさせる。

イ 地域区分してとらえる現代世界の諸課題

世界各地に生起している地球的課題に関する諸事象を分布などに着目し地域区分して追究

し、その空間的配置や類似性、傾向性をとらえさせるとともに、地域区分することの有用性に気付かせ、それに関する技能を身に付けさせる。

ウ 国家間の結び付きの現状と課題

現代世界の国家群や貿易、交通・通信などの現状と課題を地域の環境条件と関連付けて追究し、それらを世界的視野から地域性を踏まえてとらえさせるとともに、国家間の結び付きを地理的に考察することの意義に気付かせる。

ク 民族、領土問題の地域性

人種・民族と国家との関係、国境、領土問題の現状や動向を世界的視野から地域性を踏まえて追究し、それらの問題の現れ方には地域による特殊性や地域を超えた類似性がみられることをとらえさせ、その解決には地域性を踏まえた国際協力が効果的であることなどについて考察させる。

3 内容の取扱い

(1) 内容の全体にわたって、次の事項に配慮するものとする。

イ 地理的な見方や考え方や地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること。

ウ 現代世界の動向や地域の変容に留意し、歴史的背景を踏まえて地域性を追究すること。

オ 各項目の中でできるだけ日本を含めて扱うとともに、日本と比較し関連付けて考察させること。

(2) 内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

イ 内容の(2)については、次の事項に留意すること。

(ウ) イ及びウについては、それぞれ地誌的にとらえる視点や方法を学習するのに適した二つ又は三つの地域を事例として選び、地誌的に考察する学び方が身に付くよう工夫すること。その際、地域性を地誌的に考察するに当たっては、取り上げた地域における特徴的な事象とその動きに着目し、他の事象を有機的に関連付けるかたちで多面的・多角的に追究する地誌と、取り上げた地域の多様な事象を項目ごとに整理するかたちで多面的・多角的に追究する地誌とがあることに留意し、この両方の地誌を学習できるよう工夫すること。また、イにおける国家及びウにおける州・大陸に替えて、州・大陸を幾つかに区分した規模の地域を選ぶことができること。ただし、その場合、替えるのはイ又はウのいずれかにすること。

●出典・参考図書

- ・『高等学校学習指導要領 地理歴史編 平成11年12月 平成19年3月 一部改正』文部科学省
- ・『新詳地理 B』帝国書院
- ・『最新地理図表 GEO』二宮書店
- ・『データブック・オブ・ザ・ワールド』二宮書店